



立ち話の中身

園長 野中 泉

つい最近のことです。園に保育実習に来ていた学生さんにこんな質問をされました。「保育士さんと保護者の方が、テラスでお話されているのをよく見かけます。あれは、何をお話しているんですか？」

そう改めて問われて、その場にいた烏野主任と思わず顔を見合わせました。「その日の子どもの様子を話したり、けがをしたとか、させたとかを伝えることもある。家庭での子育ての悩みも聞き、園での気がかりな様子を伝えたりもする。少し元気がないけど、仕事忙しい？と保護者に声をかけたり、反対にのなちゃん疲れた顔してるけど大丈夫？と声をかけてもらうこともある。仕事の悩みや愚痴を吐いていく人もいるし、時には、離婚の相談や家族の病気など、とても深刻な打ち明け話を聞くこともある。保育士のこの物言いはおかしいとテラスで喧嘩していることもあるよ」。私のそんな答えに、思った以上にびっくりして目を丸くした学生さんの反応を見ながら、そうか、アトムでは当たり前のこの光景は、やっぱり当たり前ではないのだと改めて気づかされます。

先月号のアトムっ子の巻頭文には、いつもよりたくさん反響がありました。日報に感想を書いてくれた人も何人もいましたが、それこそ、朝夕のテラスで、「のなちゃん、読んだよ」とたくさんのお母さんたちが声をかけてくれました。「よかった」という感想よりもザワザワと心が動いたという反応が多いのが印象的でした。「なんで、すぐに『そんなことない』と言いついてくれなかったの？ 私たちは一緒に歩んでると思ってきたのに」と怒ってくれた人もいたし、「なんだか、無性に涙が出た」言ってくれた人も何人かいました。「実は、私も担任とのやりとりで、わかりあえないまま蓋をしていることがある」とか「正直な言葉で他人と向き合うって難しいよね」と自分のことに置き換えて真剣に話してくれた人もいました。

実をいうと、先月号に書いた保護者とのやりとりも、夕方の薄暗いテラスでの立ち話でした。「保育園とは、どんな場所か。親と保育士はどんな関係でありたいと思っているのか」そんな大事なことを立ち話でするなんて、という人もいるかもしれませんが、わざわざアポをとって、園長室（アトムにはないけど）の敷居をまたぐ必要がない、足を止めるだけの『立ち話』だからこそできる話もあると感じています。

世の中で『介護サービス』『保育サービス』という言葉が使われるようになって、もうずいぶんたちます。もちろん、保育園は働く保護者のための場所ですから、安心して子どもを預けられる「託児」としての役割はサービスといえる一面もあるでしょう。でも、子どもたちが失敗やトラブルをおこしながらそれを糧にして育っていく日々を全力で応援するアトムの保育や、子どものことだけではない様々な問題、時にはそれぞれの人生に踏み入るようなことまでわかちあい語り合ってきた私たちと保護者とのこの関係を「サービス」という言葉で言い表すのは、やはり、とても違和感があります。そんなことをモヤモヤと考えていたら、「私の大事な場所」という本で「託児と保育」について書かれていた、ある一節を思い出しました。

両者のもっとも大きな違いは「コト」がおこることをどう捉えるかにある。少々極端に言えば、保育は「コト」がおこってなんぼの世界。託児は「コト」がおこらなくてなんぼの世界ともいえる。現場の保育士たちは、保育と託児の境目をいったりきたりしながら、日々子どもたちとつきあっているともしえる。（引用：『私の大事な場所～託児と保育を考える～』西川正著）

アトムのしおりには、冒頭に保護者と保育士との関係について、「預ける側」「預かる側」という関係を越えて、子育てをする仲間と書かれています。それは、言い換えればこの「いったりきたり」を双方で共有していくことなのかもしれません。保護者と保育士との関係を問われている今だからこそ、足をとめ語り合いたいことがたくさんあると思っています。

※アトムっ子の巻末に、引用した「託児と保育を考える」の全文をつけました。2005年に発表された文ですが、同年は埼玉県上尾市の保育園で起こった園児の死亡事故が全国にショックを与えた年であり、著者の西川さん自身、同じ上尾市で保育所に子どもを預ける保護者のひとりでもありました。興味のある方は、ぜひ全文お読みください。